Nara Women's University

子どもの「ことば」にみる音の響きと身体性

メタデータ	言語:
	出版者: 奈良女子大学臨床心理相談センター
	公開日: 2019-07-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 黒川,嘉子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://nara-wu.repo.nii.ac.jp/records/2001675

奈良女子大学心理臨床研究 第４号　2017年　pp.9–16

子どもの「ことば」にみる音の響きと身体性

黒川　嘉子
（奈良女子大学研究院生活環境科学系臨床心理学領域）

要約：子どもにとって遊ぶことが自然な表現手段であることからプレイセラピーがおこなわれているが，言葉によるかかわり合いがないわけではない。言葉によって，他者や社会とのつながりを得ると同時に前言語レベルでの総括的体験を粉砕する両刃の特性を理解したうえで，子ども特有の「ことば」に注目した。言葉の秩序にとらわれない子どもが創り出す「ことば」からは，移行対象・移行現象の性質をもつこと，音の響きが生気情動の動きを表していることなどが見出され，主観的な体験の全体性を保持しながら，外的な他者とのつながりも可能にしていることが考察された。また，意味内容の理解ではなく，音感性から言葉とらえることは，今，ここで生じている体験を感じ取ることであり，子どもの「ことば」を聞くセラピストのあり方も示唆された。

キーワード：プレイセラピー，生気情動，移行対象としての言葉，オノマトペ，音

はじめに

来談者の語りを聴くことは，心理療法における基本と言える。同時に，セラピストが，来談者に問いかけたり，受け取ったことを伝えたり，語りかけること無しに心理療法は成り立たない。

来談者が子どもの場合も，これは何も変わらない。しかしながら，筆者自身のプレイセラピー体験においても，またカンファレンスやスーパーヴィジョンなどで聞くケースにおいても，なぜかプレイセラピーにおいて，来談者の子どもの言葉をどのように受け止め，また，彼らに対して，どのように言葉をかけてよいのか，どのような言葉をかけたらよいのかとセラピストが戸惑う場面は少なくないように思われる。

前稿（黒川，2016）において考察したように，プレイセラピーの場は，秩序の揺らぎを体験する場となり得る。本稿では，子どもたちが発する身体性をともなう実存的な問いに，どのような「ことば」の力が立ち現れてくるのか，子どもならでは，プレイセラピーならではの特徴を取り上げ，その専門的理解を深めることを目的とする。

セラピストにとってのプレイセラピー

子ども（おおよそ思春期までの子ども）への心理療法のひとつとして，プレイセラピーがおこなわれることについて，Axline, V. M.（1947／1972）が端的に“あそびが子どもの自己表現の自然な媒体である，という事実にもとづいています”と述べている。さらに，大人が“自己の困難な事情を，『話すことにより表出する』ように，自分の気持ちや問題を，子どもが『遊ぶことにより表出する』ためにあたえられている一つの機会”としている。また，Freud, S.（1908／1969）も，孫の糸巻き遊びから在－不在のテーマを見出し，子どもにとっての遊びは，“受身的に強いられる現実の体験を，空想の中で能動的に演じなおすことによって，その心的な苦痛を乗り越えようとする心のはたらきである”としている。これらは，いかに子どもの心的過程と遊びが不可分なものかを表しており，子どもの心理療法として，プレイセラピーをおこなう考え方の土台と言える。

一方，大人であるセラピストにとって，プレイセラピーはどのような体験であろうか。Landreth, G. L.（2012／2014）は，“子どもたちが自身の情緒的世界を表現し，探求するのを後押ししようと努めるなかで，セラピストは自分の世界の現実性と言語による表現から自由になり，子どもたちの考える感情に満ちた世界に

移らなければなりません。”と述べている。たとえば，来談に至った子どもが抱えている問題について，子ども自身が話をしてくれることもあるが，セラピストが問いかけてみても，首をかしげたり，困っていることは特にない，大人（親や教師など）に言われて来たなど，よくわからないという反応であることは少なくない。その際，セラピストは，「よくわからない」という感覚の中に身を置き，子どもの体験世界を共にし，遊びに表現されることを，情緒的交流を基盤として理解していこうとする。しかし，実際のところ，親から語られる子どもの問題やその背景，さらには教師からの情報などから分かろうとしていることがある。子どもの心理療法において，子どもを抱える環境の重要性は大前提のことであるが，知らず知らずのうちに，セラピストにとっては自然である大人たちとのあいだで共有される現実性や，言語による表現という準拠枠から子どもを見てはいないだろうか。

日本の子どもへの心理療法やプレイセラピーの現状について，鵜飼（2010）は，英国との比較の中で，セラピスト側が，子どもや青年は，自分の気持ちや考えを話すことができない，あるいは苦手であるというような先入観をもち，子ども自身が自分について話し出すことを無意識的に避けているのではないかとしている。また，田中（2011）も，子どものもっていることばの力を軽視しがちな点や，ことばで共有する部分は親面接に任せておけばよいという思い違いもあるのではないかという点を指摘している。筆者も同様の印象を抱いていることは否めないが，個々のセラピストはただ遊んでいればよいと思っているわけではなく，子どもからのメッセージを受け取り，理解しようと，相当のエネルギーを費やしている。しかし，遊びを通して表現される多義的で多層的な子どもの姿を前に，むしろセラピストの方が言葉を失い，話せなくなっている可能性は考えられないか。もしくは，言葉を切り離すことによって，ようやく“子どもの考える感情に満ちた世界”（Landreth, 2012／2014）にとどまることができるのかもしれない。

Stern, D. N. にみる両刃の言葉

プレイセラピーの体験を言葉にしていくことは，田中（2011）の指摘どおり，セラピストとクライエントのあいだにおいても，また，プレイセラピーの実際を伝え，理解し合える関係になることが望まれる相手（たとえば保護者，他の心理士，他職種専門家，一般の方）とのあいだにおいても，まだまだ課題であり挑戦していかなければならないところである。つまりは，言葉にすることによって，理解を深め，他者と共有可能なものにしていくことは専門家としての責務である。

ただ，子どもとの情緒的交流やプレイセラピーにおける体験を言葉にしていくとき，乳児の言語獲得について Stern, D. N.（1985／1989）が述べているように，他者と共有したり，自己を物語ることを可能にするという長所だけでなく，それまでの“無様式の総括的な体験を粉砕し，それを潜行させる”という自己体験の分裂を引き起こすというようなことが起こっていないであろうか。前言語的な情緒的交流や遊びを媒体にした非言語的交流で体験している全体性が，言葉によって切り取られ，言葉になった断片が社会化されてしまうという危険性である。Stern（1985／1989）は，“言語の出現は子どもにとってとても損得入り混じったもの”と両刃の剣であることを指摘している。失われ始めるもの（あるいは潜伏してしまうもの）も，取得されるもの（より広い文化の会員として入会許可を得る）も途方になく大きいという言葉の両価性をとらえることにより，子どもと向き合うセラピストもまた，言語化のプロセスに敏感になることができる。言葉によって自分の気持ちや体験を表現することが難しいことが子どもの特徴ではなく，黒川（2016）でも考察したように，言葉という社会的秩序にのらず，混沌さや分類不能さにこそ子どもの特徴があると考えると，その全体性を表すことができる独自の「ことば」を探さねばならない。

さらに言葉について，Stern（1985／1989）は，カテゴリー性の情報を扱うには理想的な媒体であるが，情動の程度という勾配情報を表すアナログシステムを扱うには，とても不都合である

としている。たとえば，初めてプレイルームに入った子どもに対して，セラピストが「緊張してるかな？」と言葉をかけたところ，子どもが「うん」と答えるというやりとりから，緊張しているか，いないかの情報（カテゴリー性の情報）だけではあまり意味をなさない。それよりも，どれくらい緊張しているか，あるいはピーンと張り詰めた感じなのか，ピリピリしているのか，気配を消すようなシンとした感じなのか，緊張しつつもプレイルームの玩具に関心を向けて気持ちが動いているのかといった情報の方が優勢である。Stern（1985／1989）は，怒り，悲しみ，幸せなどのカテゴリー性の情動とは異なる，食欲や緊張など生き物がもっている絶え間ないvitalityに由来する感情を，生気情動（vitality affect）としてとらえようとしている。それは，抑揚やリズム，強さや形などが連続的な時間の流れの中で動いており，“波のように押し寄せる”や“爆発的な”，“あせてゆく”など，力学的で動的用語で表す方がぴったりするとしている。ここでもまた，カテゴリー化できない，つまりは分類不能で，かつ動きのある情動を表す「ことば」を必要としているのである。

その手がかりとして，子どものことばを取り上げる。福音館書店から出版されている月刊誌『母の友』に“日々の暮らしのなかで，ふと心に留まった子どものことば”が読者から投稿され，詩人であり童話作家である工藤直子が選者となって『こどものひろば』というコーナーに掲載されたものである。

「しあわせ」　さくまあきみつ（5歳）
おかあさん
うれしいときって
ハートがそらに
のぼるんだねー
記録　佐久間順子（母）
（2011年8月号）

カテゴリー性の感情としては，母親のつけた「しあわせ」というタイトルになるのであろう。ところが，子どもの言葉では「うれしい」である。しかし，ここで伝えようとしていることは，「しあわせ」なのか「うれしい」なのかの問題ではなく，ハートが空に昇るというまさに天まで昇るような思いである。気持ちを表すことに「ハート」というイメージを用い，それが空まで昇っていくという動的な体験を見事に言葉にしている。さらに，“のぼるんだねー”と長音符で伸びているところからも，聞いている他者，読んでいる他者もまた，共に動きがともなう情動体験が生じるのである。また，カテゴリー性の情動と生気情動との差異あるいはギャップを，別の5歳の子どものことばから見ることができる。

「平均台」　いとうそうへい（5歳）
こわくない
でも　足が　どきどきする
記録　伊藤佳奈子（母）
（2015年5月号）

怖いか怖くないかと問われると，怖くないと思っている。はたまた，怖くないと自分に言い聞かせたい。しかし，細く高い平均台の上で，勝手に感じている生の体験はどきどきしているのであり，これこそ生気情動を表している。それも，すくむ足に焦点化され，どきどきしているのは胸ではなく，足がどきどきしている体験なのである。

このように子どもの「ことば」からは，潜在化するであろう生気情動の動きや，今，ここで感じている直接的な体験が伝わってくる。カテゴリー化され，抽象化された情報ではないからこそ，聞いている大人の心にも留まるのであろう。確かに，語彙習得や言葉の概念化など言語発達および認知発達の側面からは，大人のようには言葉を十分に使えないとみることもできる。しかし，大人の言葉が成熟しており，子どもの「ことば」が未熟（未だ成熟していない）であるとは言い難い。子ども特有の「ことば」には，子ども自身の気持ちや体験をまるごと抱え，全体性を保持しているものがある。それらは，自己分裂を引き起こす両刃の剣ではなく，言い表しようもない無様式な総括的体験と，言葉の秩序社会の中で他者と共有できる体験とのあいだを繋ぐことも可能にしている。

移行対象としての言葉

では，無様式な総括的体験を粉砕する言葉と，それとは逆に，体験の全体性をまるごと抱える言葉にはどのような違いがあるのだろうか。たとえば，先ほど挙げた「足がどきどきする」は，一般的な言い回しにとらわれない，大人がもっているような言語のルール，秩序にとらわれていない表現である。むしろ，身体感覚をともなう直接的な体験にぴったり合う言葉を，子どもが創り出しているのである。言葉を「使う」ではなく，言葉を「創る」という視点は，乳幼児の言葉が，Winnicott, D. W.（1953）の示した移行対象・移行現象の形をとっているという視点（Dolto. F., 1984／1994，Stern, 1985／1989）にもつながる。Stern（1985／1989）は，“Winnicottの言葉で言うなら，言葉は，ある意味で乳児により「発見され」たり，「創造される」もの”であるとし，“その時，思考や知識はすでに心の中に存在しており，言葉と結びつく準備ができている”状態であるとしている。母親などの外部から与えられる言葉であるが，その言葉にふさわしい体験は乳児の内部に存在しているという意味で，言葉は，自己に属するものでも，他者に属するものでもなく，乳児の主観性と母親など外的な客観性との中間くらいに位置していると指摘し，移行対象・移行現象の性質を示しているのである。

体験にぴったりくる言葉を創り出す子どもの姿は，おそらく珍しいものではない。しかし，まだ言葉を上手く使えない，間違ってしゃべっているなどと「ことば」としては取るに足らないと見なされがちである。また，いつ頃から始まったのかはっきりせず，気がついたら必要としなくなっていたというまさに移行対象・移行現象の特徴を有していることも要因となり，捉えにくさがあるのかもしれない。そのなかで，言葉に繊細な感性をもつと考えられる歌人であり作家である東直子（2015）が，食べ物の好き嫌いをテーマにした記述において，幼児期の長男の独特な「ことば」について取り上げている。成長のプロセスも含め，やや長文になるが以下に引用する。

“それが最初に発せられたのがいつだったかは忘れてしまったが，長男が食事のときに，「むじゃい」と言っていた時期があった。

むじゃい。そんな日本語はないが，しかめ面とともに発せられるその言葉がどういった感覚を示しているかは，瞬間的にわかった。簡単に翻訳するとおいしくない，ということなのだが，苦くて，口の中がもやもやして気持ち悪い，といったところだろうか。「にがい」「むしゃくしゃする」「えぐい」といった当たりの日本語がブレンドされているようにも思える。

（中略）その後成長して，「むじゃい」とは口にしなくなり，小学校高学年くらいにふと作ってみた「ピーマンの肉詰め」が気に入り，その後，単体でも食べるようになった。しかし，グリーンピースとそら豆は，大人になった今でも「匂いがいやだ」とかで嫌いだし，しいたけは，「うえっとなる」らしい。”

東の翻訳以上の説明は不要のようにも思われるが，まさにこの「むじゃい」は，「おいしくない」というメッセージを主としながらも，それだけでなく，味覚，口触り，舌触りという触感，そして，情感までもないまぜにした創造された「ことば」である。大人になってからカテゴリー化され，社会化された言葉で「匂いがいやだ」と言っていることから，「むじゃい」には嗅覚的な感覚も含まれていたのかもしれない。まさに，Stern（1985／1989）の言う無様式知覚の総括的体験を，「むじゃい」という音の響きをもつ「ことば」によって表しているのである。

他にも，色の名称において，「あか」や「あお」は言えるものの，みどりを「ももみ～」と特別な愛着をもっているかの様子で言ったり，何を意味しているのかは定かではないが，「ぶちこぶちこぶちこ・・・・・・」と唇の感触をともなった呪文のような「ことば」を唱える子どもなどもいる。移行対象としての言葉の機能をより積極的に論じたDolto（1984／1994）が，“まだうまく使えない語のうちで移行対象となるのは，たとえ意味不明であっても，主体が直感的に感じた自分をまるごと表現できる力を得た語であろう”と述べているように，これらはいずれも子どもによって発見され，創造された「ことば」であり，体験の全体性を抱える「ことば」

なのである。

ことばがもつ音の響き

「むじゃい」「ももみ〜」「ぶちこ」など，これらの「ことば」には音の響きの面白さがある。また，先に挙げた「のぼるんだねー」や「どきどき」という「ことば」にも，リズムやテンポといった音感性の特徴がある。Dolto（1984／1994）は，“完全に象徴的なものになる前の言葉は，音の響きという特性をもち，魔術的な対象物となる”と述べている。“音感性の移行対象”として論じているが，さまざまな乳児研究においても，子どもがもつ音への感受性は，胎児期から始まり，極めて微妙な音の差異も理解でき，生後間もなくから母国語を好むことや，言葉の意味を理解することに先がけて，発話のリズムや音律，テンポに興味を示すことなどが明らかにされている（Music, G., 2011／2016）。

こうした音声から直接的に感覚的なイメージを引き出す性質を，音象徴（sound symbolism）というが，その代表的なものがオノマトペ（onomatopee）と総称される語群である（宮崎ら，2010）。オノマトペとは，「ガチャン」，「ワンワン」など音や声を模した擬音語や，「ころころ」，「ざーざー」などモノの状態，動きの様態を音で表出する擬態語，さらに広義では，「どきどき」や「そわそわ」など主観をもつ存在の内面的感情などを表す擬情語を含んでいる（篠原・宇野，2013）。つまり，聴覚的感覚のみならず，触覚や視覚など他の知覚様式の情報も「音」によって表し，さらには情緒的体験までも「音」にして表している語なのである。これまでみてきた“ある一つの知覚様式で受信された情報を，何らかの形で別の知覚様式へと変換する無様式知覚”（Stern, 1985／1989）の特徴を有しており，連続的な時間の中にある生気情動の動きも表すことができる語群である。日本の養育者が子どもとのあいだで，こうしたオノマトペを多用していることは，言語獲得の研究において示されているが（小椋ら，1997, Imai, M., et al., 2008 など），音の響きを共有することにより，生気情動レベルでの関わり，つまり情動調律（Stern, 1985／1989）を可能にしているのかもしれない。これについては，今後の研究課題である。

たとえば，乳児が好む絵本である『じゃあじゃあ　びりびり』（まつい，2001）は，水は「じゃあじゃあ」，紙は「びりびり」と，物と音の響きを結びつけるオノマトペ絵本である。ここでも，単に物をわかりやすくしているというだけでなく，水がじゃあじゃあと流れる様子や，紙がびりびりと破れる様子という動的な体験が含まれている。さらに，特徴的な音の響きを表した絵本として，『ごぶごぶ　ごぼごぼ』（駒形，1994）や『もけら　もけら』（山下・元永，1990），『もこ　もこもこ』（谷川・元永，1977），『がちゃがちゃ　どんどん』（元永，1990）などがある。これらは，ストーリーのある内容ではなく，不思議な音の響きと，形態と色彩の妙によって描かれた何かよくわからないモノが互いに連動している。絵本のページをめくっていっても，何を意味しているかわからないが，音の響きと抽象的な絵から何かのイメージが湧くのである。

ただし，具体物の性質やストーリーの理解ではなく，イメージの共有は，他者とのあいだで同じ体験をしているか確かめようがない面がある。たとえば，ある人は“ごぶごぶ”，“ごぼごぼ”という音から水の中に入っていくプロセスで，ぼこぼこと水泡が出てくるイメージを喚起するかもしれないが，一緒に絵本を見ている他の人が，同じイメージを抱いているかはわからない。筆者自身の体験として，言葉が出始める前から『ごぶごぶ　ごぼごぼ』の絵本を気に入り見ていた子どもが，言葉を話すようになってから，あるとき，水玉模様の毛布を見て「ごぶごぶ」と呼び，同じようなイメージを抱いていたのかと重なり合いを不確かながらも感じたということがある。その後，水玉模様を「ごぶごぶ」と呼ぶようになり，特別な「ことば」となるが，先ほどの「むじゃい」などと同じように，音の響きをともなった愛着のある「ことば」もいつの間にか使わなくなり，不特定の他者とも共有可能な「水玉」という名称になっていったのであった。

音と呼び名のあいだ

このように，「ことば」のもつ音の響きには，身体感覚をともない，生き生きとしたイメージを喚起する働きがある。一方で，たとえ体験を共にした特定の他者とのあいだでも，その体験が同じかどうか，イメージしているものが同じかどうかは確かめようがなく，また，音として消えてしまうという儚さをもっている。しかし，それらは不特定の他者とも共有可能な言葉となって生き残るのである。Dolto（1987／1994）は，移行対象として言葉が最良であるいう考えは，言葉は毎日変わるからであり，他の対象物（タオルやぬいぐるみなど）のように，話し言葉（パロール）は失われることがないからであり，そして，話し言葉（パロール）を発することによって，その言葉を他者と交換できるからであるとしている。

音の響きとモノの名称，そして話し言葉を感じ取るために，『1年1組せんせいあのね　それから』（鹿島・灰谷，1994）に掲載されているある兄弟と母親とのやりとりを取り上げる。

あのねのざいりょう　すぎたに　あらた
　かおるが
　「ようちえんでゆきがふった」といった
　あらたが「あめみたいなゆきがふった」といった
　そしたらママが「それはみぞれよ」といった
　そしたらかおるはピアノで「ミドレ」とひいた
　どうしてかおるは
　いつもおもしろいことをかんがえるのかなあ
　かおるにきいたら
　「おにいちゃんにあのねちょうのざいりょうをつくってあげているの」といった

弟の雪が降ったという体験は，兄の雨みたいな雪という表現に引き継がれ，母親から「みぞれ」という名称を兄弟は教えてもらう。「みぞれ」という新しい語彙の習得であっても，弟が「み（ミ）ぞ（ド）れ（レ）」と音を響かせたことで，まるで命が宿り，言霊のようになるのである。

また，ある女児（2歳ごろ）は，就眠時，そばに実際の母親がいても，「おかあさん！」「おかあしゃん↘」「ま・ま」など，呼び方や声の調子を変えながらひとしきり“母親”の呼び名を声にする。呼ばれていると思った母親が返事をすると，邪魔しないでというように母親の口をふさぐのである。つまり，主観的な母親を呼び起こし，ときに，互いのタイミングや調子があうと「おかあさん」「はあい」というやりとりを楽しみ眠りに入るのである。

このように，モノの名称や呼び名など，一般的に社会化された他者と共有できる言葉であっても，その意味は固定化されたものではない。特定の他者との関係性のなかで，言葉の意味は作られていくが，音の響きがあるからこそ，主観的体験を揺るがすことができるのではないだろうか。Stern（1985／1989）は，言葉は，総括的な体験の一断片をとらえるものであるにもかかわらず，体験を鋳直したり，変換する強い力をもっていると述べ，言葉によって他者と体験を共有するだけでなく，自分自身について言葉で語れるようになり，言葉によって，自分の体験に対する見方を変える可能性を秘めていることに言及している。これは，心理療法における自分語り narrative の効果を示唆するものである。プレイセラピーにおいても，クライエントである子どもとセラピストが，ことばのもつ音の響きを感じ，生気情動レベルでかかわり合うなかで，「ことば」の力によって体験を変化させる可能性は生じるのであろう。ただし，Stern自身も疑問を呈しているように，起承転結や因果関係的連鎖をもって展開する物語を，子どもが構成するかはわからない。むしろ，本田（1992）や黒川（2016）で示しているように，可塑性や非連続性など，秩序を揺るがす特性を子どもにみるのであれば，大人が考えるようなストーリー性をもった自分語りではないのかもしれない。たとえば，筆者の名前を反対から読み，「先生，‘こしよ’やな」と言った子どもとのあいだで，香辛料のコショウがイメージされ，セラピストがコショウなら，自分は何だろうと，まさに自分は何にでもなれるというような可能性を秘めた体験が生み出された。プレイセラピーにおける「ことば」の力とは，「ことば」自体が生命を宿すことかもしれない。

おわりに　──「ことば」の記録──

音感性から言葉をとらえると，意味の理解よりも，今，ここで生じている体験を感じ取ることに重点があることがわかる。また，子ども特有の「ことば」や遊びから喚起されるイメージは，クライエントとセラピストのあいだで重なり合うものの，クライエントがどのような体験をしているのか確かめようがない面がある。プレイセラピーにおいて，こうした無様式という流動性のもとで感じ取ったことを記録していくときに，あまりにも不確かなため，分かろうとして言葉という秩序の網にかけてしまっていることはないだろうか。クライエントの遊びを理解しようとする思考から，因果的な意味のまとまりをもたせようとする過程で，「ことば」がもつ音の要素を網の目から落としてしまっているかもしれない。むしろ，プレイセラピーの特徴を活かしていくためには，子ども自身の「ことば」をすべての身体感覚を動員して聞き，その音の中に身を置いてみることが大切であろう。独特な音がもつ魔術的な力も含め，その「ことば」でしか言い表せないものを記録に残していく挑戦は，オノマトペなども用いつつ，いくつもの言葉で翻訳していく作業を必要とする。そうしたプロセスが，クライエントとセラピスト，そして社会にもつながるプレイセラピーの「ことば」を発見し，創り出していくことになるのではないだろうか。

付記

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（一般）「乳幼児期の象徴化を生みだす分離と言葉に関する臨床心理学的研究」（課題番号：16K01867）の一環として行われたものである。

引用文献

Axline, V. M. (1947／1972). PLYA THERAPY 小林治夫（訳）遊戯療法　岩崎学術出版社

Dolto, F.（1984／1994). L'image inconsciente du corps. Éditions du Seuil.　榎本譲（訳）無意識的身体像──子供の心の発達と病理 1, 2　言叢社

Dolto, F. (1987／1994) . *Dialogues québécois.* 小川豊昭・山中哲夫（訳）（1994）子どもの無意識　青土社

Freud, S. (1908／1969). *Der Dichter und das phantasieren.*　高橋義孝（訳）詩人と空想すること　フロイト著作集3　人文書院 pp.81–89

東直子（2015）．好き嫌いの理由　母の風景⑧『母の友』11 月号　福音館書店　6–7

本田和子（1992）．異文化としての子ども　ちくま学芸文庫

Imai, M, Kita, S., Nagumo, M. & Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb learning. Cognition, **109**, 54–65

鹿島和夫・灰谷健次郎（1994）．一年一組せんせいあのね　それから　理論社

駒形克己（1999）．ごぶごぶ　ごぼごぼ　福音館書店

工藤直子（選）（2011･2015）．こどものひろば『母の友』　福音館書店

黒川嘉子（2016）．家庭内における野生性──大人と子どものあいだで生じる秩序の揺らぎ──

Landreth, G. L. (2012). PLAY THERAPY : The Art of Relationship, 3rd edition　山中康裕（監訳）（2014）新版プレイセラピー　関係性の営み　日本評論社

まついのりこ（2001）．じゃあじゃあ　びりびり　偕成社

宮崎美智子・岡田浩之・針生悦子・今井むつみ（2010）．対成人・対幼児発話におけるオノマトペ表出の違い──母子絵本読み調査における検討から──　電子情報通信学会技術研究報告．TL, 思考と言語　**110**（63）27–31

元永定正（1990）．がちゃがちゃどんどん　福音館書店

Music, G. (2011／2016). Nurturing Natures—Attachment and Chidren's Emotional, Socio-cultural and Brain Development.　鵜飼奈津子（監訳）子どものこころの発達を支える

もの「アタッチメントと神経科学，そして精神分析の出会うところ」誠信書房
小椋たみ子・吉本祥江・坪田みどり（1997）．母親の育児語と子どもの言語発達，認知発達　神戸大学発達科学部研究紀要　5（1）1–14
篠原和子・宇野良子（編）（2013）．オノマトペ研究の射程――近づく音と意味――　ひつじ書房
Stern, D. N. (1985／1989). The Interpersonal World of the Infant. 小此木啓吾・丸田俊彦（監訳）乳児の対人世界　理論編・臨床編　岩崎学術出版社
田中千穂子（2011）．プレイセラピーへの手びき――関係の綾をどう読みとるか――　日本評論社
谷川俊太郎（作）元永定正（絵）（1977）．もこもこもこ　文研出版
鵜飼奈津子（2010）．子どもの精神分析的心理療法の基本　誠信書房
Winnicott, D. W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena : A study of the first not-me possession. *International Journal of Psycho - analysis*, **34**, 89–97
山下洋輔（文）元永定正（絵）中辻悦子（構成）（1990）．もけらもけら　福音館書店